

1. 全ての子供を自立した学習者にまで育て上げる

中教審答申「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」にもあるように「子供たちの知・徳・体を一体で育む『日本型学校教育』は、全ての子供たちに一定水準の教育を保障する平等性の面、全人教育という面などについて諸外国から高く評価されている」（5頁）が、同時に深刻な問題を抱え込んでいながらも、新型コロナウイルスの感染拡大によって明らかとなった。

その典型が「学校の臨時休業中、子供たちは、学校や教師からの指示・発信がないと、『何をしてもいいかわからず』学びを止めてしまうという実態が見られたこと」であり、「これまでの学校教育では、自立した学習者を十分育てられていなかったのではないか」（13頁）との懸念である。

その原因について答申は「我が国の経済発展を支えるために、『みんなと同じことができる』『言われたことを言われたとおりにできる』上質で均質な労働者の育成が高度経済成長期までの社会の要請として学校教育に求められてきた中で、『正解（知識）の暗記』の比重が大きくなっていったこと、「学校では『みんなと同じことを、同じように』を過度に要求する面が見られ、学校生活においても『同調圧力』を感じる子供が増えていった」（8頁）ことなどを挙げている。

「令和の日本型学校教育」では、これら「正解主義」や「同調圧力」といった従来からの問題を克服し、全ての子供を「自立した学習者」にまで育て上げることを目指す。そのために求められるのが、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」にほかならない。

2. 子供の都合とタイミングで学び進められるパラダイムへ

以上から明らかかなように、個別最適な学びも協働的な学びも、単なる形態の問題として扱うのではなく、いわゆるパラダイムシフトが求められる。ここで参考になるのが、1990年にブランソンが来たるべき情

個別最適な学びを進めるために必要なこと

上智大学総合人間科学部教育学科 教授 奈須 正裕



報化社会を見据えて提起した図のようなモデルである。教師があらかじめの正解を一方的に教え込む「口頭継承パラダイム」という過去のモデルから、1990年時点では教師と生徒、生徒と生徒の間で双方のやり取りがなされる「現在のパラダイム」への移行が完成しているという。

ちなみに、ブランソンはアメリカの学校の現状に基づき、生徒間の相互作用は二次的なものであるとして、わざわざその箇所の矢印を点線にしているが、日本の授業ならば、堂々と太い実線で表しているだろう。この点に関して、日本の授業は世界に冠たる水準に達していると言っている。

とは言え、そんな日本の授業も含め「現在のパラダイム」では、生徒は常に教師を紹介してのみ、学習の対象である「経験」や「知識」に出合うよう制約されている。これに対し、ブランソンが未来の学校教育のモデルとした「情報技術パラダイム」では、生徒が教師を紹介することなく、一人ひとりの都合とタイミングで「知識データベース」や「エキスパートシステム」にアクセスし、各自が今現在必要とする「経験」や「知識」と出合い、主体的・個性的に学びを進めていく。

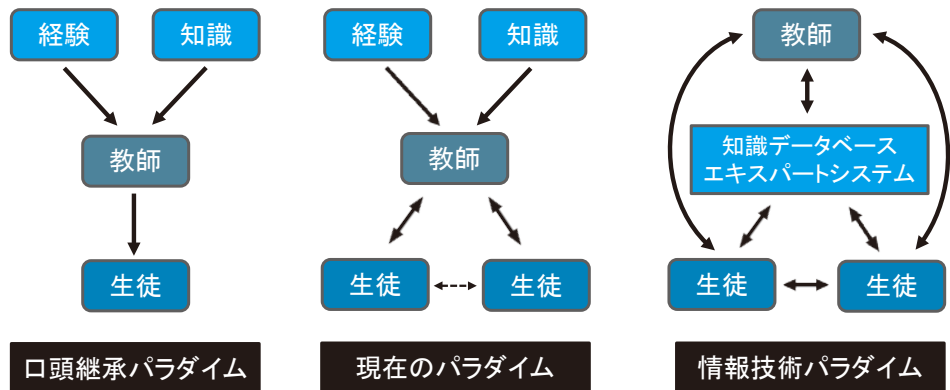


図 学校教育の過去・現在・未来のモデル (Branson,1990)

もちろん、学びは「孤立」的なものではなく、生徒相互の間で自発的に生じる豊かで自然な対話や協働を伴いながら展開される。「現在のパラダイム」では伝達者、ゲートキーパーの役割を担い、情報のコントロールを全面的に掌握していた教師は、その役割を学びのコーディネーター、ファシリテーターへと大きく変貌させていく。そうになると、もはや過剰な権威も不要となるだろう。「生徒になめられないことが肝心」などといった前近代的な言説は、学校からすっきり放逐されるに違いない。

ただ、このようなパラダイムシフトを実現し、個別最適な学びを日常化するには、子供たち一人ひとりが自在に活用できる情報端末と、ストレスなくクラウドにアクセスできる高速大容量のネットワーク環境が不可欠である。ブランソンがモデルを提起した1990年時点では夢のような話であったと思われるが、これが2022年の日本の学校では、すでにほぼ完璧に実現されている。

これこそがGIGAスクール構想の真価であり、個別最適な学びに際し、答申が「子供がICTも活用しながら自ら学習を調整しながら学んでいく」(17頁)ことを強調する真意である。一人一台端末がほぼすべての授業で主体的・個性的に使われている学校と、週に何回かのみ、しかも一斉画一的にしか使われない学校の違いは、このようなパラダイムシフトの実現状況に全面的に依存している。

3. 規律訓練型教育との決別

ブランソンは、未来のモデルの中心に「知識データベース」と「エキスパートシステム」を描いたが、さらに敷衍するならば、学習環境全般とすることも可能であろう。すると、日本の一般的な幼児教育のモデルにもなるし、教育学的にはルソーが『エミール』で描いた世界にもなる。何のことはない。特に未来の教育ではなかったわけだが、逆に言えば普遍性を兼ね備えていたとも言えよう。

写真はごく普通の幼稚園の様子だが、道具も材料も子供たちの都合とタイミングで、いつでも自由に使っていけるようになっていっている。ところ

「個別最適な学びを進めるための副校長・教頭の役割」

〈連載テーマ②〉 学習指導要領

が、小学校に上がった途端「今日はハサミを使います。先生が配りますから、1班の人だけにいらつしやい。後の人は静かに待ちます」なんて抑圧的な環境に置くから、子供たちは一気に主体性も個性も感性もすべて封印してしまう。

というわけで、個別最適な学びを含め、「令和の日本型学校教育」への取り組みは「手はお膝、お口チャック」や「生徒になめられない」など、抑圧的な規律訓練型教育との決別から開始したい。



写真 幼稚園における学習環境整備